

ロシアがプロレタリア革命をはじめることがたやすかった理由と革命的プロレタリア・インタナショナルの主導権が一時的にロシア人の手にうつった理由

……革命的プロレタリア・インタナショナルの主導権は、かつて十九世紀の異なる時期に、イギリス人、ついでフランス人、ついでドイツ人の手にあったように、一時的に一ももちろん短いあいだにすぎないが——ロシア人の手にうつった。

私はすでに何度かつぎのように言ったことがある。ロシア人には、偉大なプロレタリア革命をはじめるとは先進諸国にくらべてたやすかったが、この革命をつづけ、社会主義社会の完全な組織化という意味での最後の勝利までやりとおすことは、より困難であろう、と。

われわれにそれをはじめることがたやすかったのは、第一に、ツァーリ君主制が政治的に異常に——二十世紀のヨーロッパとしては——おくらせていたため、大衆の革命的襲撃が異常な力をもったからである。第二に、ロシアのおくられていることが、ブルジョアジーにたいするプロレタリア革命と地主にたいする農民革命とを独特の形で融合させたからである。1917年10月に、われわれはこのことからはじめた。そして、もしこれからはじめなかったなら、われわれは当時あのようにたやすく勝利をおさめることはできなかったであろう。マルクスはすでに1856年に、ロシアを論ずるにあたり、プロレタリア革命と農民戦争との独特の組合せが可能であることを指摘した〔第5巻、499ページ〕。ボリシェヴィキは、1905年の初めから、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁の思想を主張してきた。第三に、1905年の革命が労働者・農民大衆の前衛に西欧社会主義の「最新の成果」を知らせた点でも、大衆の革命的行動の点でも、労働者・農民大衆の政治的訓練のために異常に多くのことをなすとげたからである。1905年のそれのような「総稽古」がなかったなら、1917年の革命は二月のブルジョア革命も十月のプロレタリア革命も不可能だったにちがいない。第四に、その地理的条件のおかげでロシアは、資本主義的先進国の軍事的優勢にたいして、ほかの国よりも長くもちこたえることができたからである。第五に、プロレタリアートと農民との独特の関係が、ブルジョア革命から社会主義革命にうつることを容易にし、都市プロレタリアが農村の半プロレタリア的な貧しい勤労者層に影響をおよぼすのを容易にしたからである。第六に、ストライキ闘争という長期の学校とヨーロッパの大衆的労働運動の経験とが、深刻な、急速に激化していく革命的情勢のもとで、ソヴェトのようなプロレタリア革命組織の独特の形態の発生を容易にしたからである。

もちろん、この列挙は完全ではない。だが、さしあたってはこれだけにとどめてよいであろう。

ソヴェト民主主義またはプロレタリア民主主義はロシアで生まれた。パリ・コンミュンにたいして、世界史的な第二步がすすめられたのである。プロレタリア＝農民的ソヴェト共和国は世界で最初の安定した社会主義共和国であった。それは、**国家の新しい型**として、もう死ぬことはありえない。それは、いまではもう、ひとりぼっちではない。

社会主義建設の仕事をつづけるには、それを最後までやりとおすには、まだ非常に多くのことが必要である。ロシアよりもっと文化的な、プロレタリアートの比重と影響力がもっと大きい国々がいったんプロレタリアートの独裁の道に立つなら、それらの国のソヴェ

ト共和国がロシアを追いこす見込みは十分にある。

破産した第二インタナショナルは、いま死にかかっており、生きながらくさっている。それは事実上、国際ブルジョアジーの召使の役割を演じている。それは、正真正銘の黄色インタナショナルである。カウツキーのようなその最大の思想的指導者たちは、ブルジョア民主主義を「民主主義」一般、あるいは——もっとばかげた、もっと乱暴なことだが——「純粹民主主義」と呼んで、ブルジョア民主主義を讃美している。

ブルジョア民主主義は寿命をおわった。そして、このブルジョア民主主義の枠のなかで労働者大衆を訓練することが日程にのぼっていたころには、歴史的に必要で有益な活動をはたした第二インタナショナルも、寿命をおわった。

第 29 卷『第三インタナショナルとその歴史上の地位』P308～309

1919 年 4 月 15 日